

からるゝかも知れませんが

(問) 西洋畫の何處を持つて來て日本畫に調和しやうと思ひますか

(答) 是ハむづかしい事です……まあ試みに言つて見るのです
が今日でハ人物でも解剖上から見ると悪いといふ非難がありま
して是迄の名畫なり佳い彫刻なりが皆是がために破れて了しま
す 併し奈良邊りの佳い彫刻を見ますと例へば片方かたぐの手が長く
て全体の均齊つらおが採れて居ないので少しも悪くハ見えません
手が膝まで引摺られて居るのハ解剖上から見ると不完全だと云
ふのですけれども夫が唯見ると如何にも佳いやうに見えるのハ
何んなものでしよう 是が問題だらうと思ひます 足利時代の
少し密な所を見ても解剖や遠近法扱は悉く欠點だらけですけれ
ども何故か佳く見えます 是は何故能く見えるか知りませんが
彼の儘に解剖や遠近法を完全せしめたなら尙一層巧いものが出
來はしないかと思ひます〔一字欠損〕□は私わたくしの考へ丈けですが如何いかにでしよ
う 斯う遣ると全く壞れて了ふものですか知らぬ 西洋の宗教
畫の完全したのになると手を合はせて自然に頭の下るのがあり
ます 部分の美が行き届いて居るのです 左様すると如何いかにして
も出来る譯だと思ひますが……私は今度の西洋行きが決り
ます前確か一昨年でしたフエノロサ〔明治三十年四月〜同三十三年
八月日本滞在〕に會うてラハアエル當時の研究法を聞いたことが
ありましたが判りませんでした 西洋むかよのを見ないでいふと何で
すが今日の西洋畫は自然といふ事に傾き過ぎモデルに拘泥して
居つて神様を畫いても人間臭くて頭が下がらないやうな感じが

あります 古人は高い理想を持つて居つてモデルを利用したの
ですが此節はモデルから神様が出るやうになりました 是は畫
を描く人の考へであるのでしようが西洋の古畫を見るとマリヤ
ハマリア丈けの威嚴があつて形杯も指の先迄注意が届いて居り
ます(終)

觀山は翌三十六年二月二十日出発。同三十八年三月、ロンドンで
の勉強を終え、フランス、オランダ、ドイツ、オーストリア、イタ
リア、ボンベイを経て十二月十一日帰国。ジョン・エヴァリット・
ミレー筆「ナイト、エラント」模写、ラファエル筆「まひわの聖
母」模写等はこの間の勉強の成果である。

⑫ 生徒心得の改正

明治三十五年三月二十四日、右の改正がなされたが、単に第五
条中の「五日以内ハ各自ヨリ其五日ヲ超ユルトキハ」と「若シ之ヲ示
サマルトキハ門衛ヲシテ入門セシメザルコトアルベシ」の語句が削
除されたのみである。

⑬ 山名貫義の死去

東京美術学校近事(140頁)に記されているように、日本画科教授山
名貫義は明治三十五年六月十一日に死去した。『東京美術学校校友
会月報』第一卷第二号(同年七月)の巻頭には肖像写真と次の追悼記
事が掲げられた。

故山名貫義先生畧歴

明治三十五年六月十一日、東京美術學校教授帝室技藝員從五位勲六等山名貫義先生、小石川水道町一丁目の自邸に於て卒す、享年六十有七。其計の本校に到るや、諸生皆慨然として筆を擲ち、潸然として涙下り、悲痛慟哭、措く所を知らず。嗚呼天命といふと雖、未だ爲すあるの身を以て、臥蓐僅に旬日、不幸にして遂に起つ能はざるに至れり。哀哉。是れ獨り我が校の爲に悲むのみならず、美術上の鑑識家として、住吉畫派の大家として、歴史畫の故實家として、斯道の爲に深く痛惜する所なり。

先生實に天保七丙申歲三月朔日を以て、江戸二番町に生れ、丹青の家に人と成る、父を行雅（後廣政と改む）といひ、畫を以て紀州侯に仕へ、江戸の藩邸に伺候す。先生天稟繪事を嗜む。七八歳の頃、其父廣政に隨ひ、幕府の繪所住吉内記廣定の家に遊び、廢紙を乞ひ得て大に喜び、筆を執りて種々の形象を描く、座に在るもの、其畫才に驚嘆せりといふ。稍長じて、贅を住吉廣定に執りて學ぶ、住吉家の例に、歲首門弟をして、如意寶珠を畫きて、以て試筆をなさしむ。其次序高弟より畫き、漸次幼者に至る、先生時に猶幼、人の爲す所を見、竊に以爲らく、衆生の畫く、筆致纖弱なり、余將に大寶珠を畫きて、以て其の筆力を試みむと。乃ち筆を執りて揮灑す、筆勢逾壯、傍ら人なきが如く、餘勢逸して氈上に及ぶ。師廣定大に其剛健を稱し、鍾愛他に超えしといふ。幾もなく、廣定歿し、其子弘貫に師事し、切磋奮勵、技倆大に進み、嶄然として頭角を顯はせり。而して當時畫界の形勢を視るに、狩野派獨り勢威を恣にし、他派の如きは、有れども無きが如

き觀あり。或人先生に勸むるに、他派に轉ぜんことを以てす。先生頑として肯ぜず、一意其志す所を研鑽し、堂奥に到らざれば、已まざらむとす。師弘貫亦大に先生を愛し、其歿するに臨み、後事を先生に託す、先生乃ち其志を繼ぎ、其家を經理し、専心繪事に執筆す、後先生の住吉派に於て、令名を博したる、蓋し偶然に非るなり。

既にして、幕府大政を奉還し、世態も亦一變し、諸藩の士、離散坎珂、妻子飢に泣き、活路を求むるに汲々たる時に方り、先生繪事に由り雇を以て測量司に入り、明治七年二月二等少技生に進み、八年五月勸業寮十四等出仕に補せられ、物産取調の爲め琉球へ出張す。十年一月に至り、廢寮となり、職務を免さる、其年二月内國勸業博覽會事務局の雇となり、七月博物館に移り、佛國博覽會事務取扱を申付けらる、十一年四月埼玉縣下に出張して、穴居の跡を調査し、同年五月内務九等屬に任ぜらる。十三年四月一日觀古美術會の判者を申付けられ、十四年四月農商務九等屬に轉じ、同じき七月八等屬に進む。十五年九月内國繪畫共進會の審査官となり、十六年十二月七等屬に昇り、十七年三月第二回内國繪畫共進會の審査官を申付けられ、十八年十二月に至りて非職申付けらる。臨時全國寶物取調局の開始せらるゝや、先生鑑識の技能を以て、出でて職に従ひ、大に力を茲に致せり。蓋し今日國寶保存の基礎確立せる、先生の功亦實に多きに居れりといふべし。廿三年に至り第三回内國博覽會の開かるゝに方り、其審査官となり、廿七年八月三日始めて本校授業を囑託せられ、翌廿八年十二月十四日願に依りて囑託を解かる。同三十年六月廿日帝室技藝員

に擢でられ、同年十月古社寺保存會委員に擧げらる。三十一年八月十一日復び本校に入りて教授となり、高等官六等に敘せられ、同じき年九月正七位に敘す。卅三年十二月高等官五等に敘せられ、越えて翌卅四年四月從六位に敘せらる、本年六月二日俄然腦溢血症に罹り、療養手を盡すと雖、遂に其効を奏せず、溘焉不歸の客となる。卒するの前、朝廷其殊功を嘉し、特旨を以て、位二級を進め、從五位に敘し、勲六等瑞寶章を授けらる。蓋し異數なり。

先生の繪事の重なるものを擧ぐれば、明治十二年外務省の依託を受け、外國人饗應に供する、本邦古畫の諸圖を摸寫したるあり。十三年宮内省より、後醍醐天皇御自畫御影の摸寫を命せられたるあり。又十五年十月十一月及十七年五月には、共進會へ行啓の節御前畫を勤め、十七年第二回博覽會に出品しては銀章を受^けけ。十九年皇居御造營に際しては命を承けて、皇后陛下御座所御床側御地袋戸及周圍の杉戸に、得意の筆を揮ひ、後復たひ御常用に係る、御歩障に、加茂祭の圖を畫けり、此他帝室博物館には、先生の摸寫したる古畫尠からず、或は原畫より優るものありといふ。其先生の作品逸話の如きは、更に記述する所あるべし。

先生資性敦厚にして溫雅、恬淡にして懇篤、利を求めず、争ふを好まず、諸生を導くや、諄々として倦まず。衆人に接するや、親疎を以て律せず。頗る古君子の風あり。少壯より酒を嗜み、晩年中風の兆ありてより、其害を知り、自ら戒飭したるも、遂に其病の爲に卒す、惜むべし。六月十四日、遺言を以て、四谷區南寺町の龍泉寺に葬る。本校職員卒業生生徒にして、葬儀に會するも

の、貳百名に近く、此他先生生前の知己故舊の會するもの、亦數百名なりしといふ。以て先生の世人に尊重景慕せられたるの深きを推知すべきなり

明治壬寅歲六月廿日 辱知 屋代晁江誌

なお、制作歴に関しては塩田英五郎編『大和絵師山名貫義略年譜』（平成二年六月）がある。

⑭ 『作品集』の発行

明治三十五年七月二日の卒業式の後十日間生徒成績展覧會が開かれたが、同年十一月、校友會はこの展覧會の図録『作品集一』を画報社より発行した。故山名貫義、教授の川端玉章、荒木寛畝、寺崎広業、助教の岡田秋嶺の作品、本年の卒業制作（図画講習科の分を含む）平常成績中の秀作の写真が掲載されている。卒業制作の記録でこれ以前のものとしては明治三十三年作成の「東京美術学校生徒卒業制作」と同三十四年作成の「東京美術学校卒業制作写真」（本学附属図書館蔵）があるが、これらは単なる写真貼込帖である。『作品集』はこれ以後逐次刊行された。刊行状況は巻末の「東京美術学校・同校友會出版物一覽」に記載する。